

されるところは、泥洹經四依品の過去の宿罪が護法の功德によつて現世に輕受するという値難觀の本拠となり、「此の經文日蓮が身に宛も符契のごとし。狐疑氷とけぬ。千萬難由なし。一一の句我が身にあわせん。」と、内省を吐露されているところである。

開目抄での涅槃經折伏は、法華第一の現實対決の具体性を帯びると共に、折伏逆化が化導の方軌なることを闡明され、本化応化のご自覺と表裏した値難觀は、自行化他にわたる折伏へと深められ、出離生死の菩提行に止揚せられるのである。ここに、「立正安國論の折伏実践のスタートと開目抄における折伏正意の結帛が認められると共に、涅槃經引用の一傾何が、折伏文によつて看取されるところである。

日蓮宗寺院の開帳について

北 村 聰

本発表は、開帳を許可する立場にあった幕府側の史料「開帳差免帳」（国会図書館蔵）を中心に日蓮宗の江戸出

開帳の特長、及び比留間尚氏「江戸の開帳」（『江戸町人の研究』第二巻所収）に示された江戸での開帳の性格の中で、日蓮宗の開帳をどのように位置付けることができるかを考察しようとするものである。

日蓮宗寺院の江戸での開帳は宝永二（一七〇五）年京都本圀寺が本所報恩寺で釈迦立像を出開帳したのがはじめて、慶応三（一八六七）年中山法華經寺の牛込円福寺での開帳まで、一六三年間に延べ一八二回、八三ヶ寺の日蓮宗寺院が江戸に出開帳をしている。他宗の江戸開帳については、寛文一〇（一六七〇）年の常陸国信太郡布佐村真福寺のそれが最も早い例で、慶応三年までに延べ五五五回の出開帳を数えることができる。

第一表は、承応から慶応に至る間に江戸で実施された開帳の年平均回数を、承応～元文を前期、寛保～天明を中期、寛政～慶応を後期としてみたものである。これによると、①全体としては、後期やや尻すばみの傾向をみせる江戸の開帳の中にあつて、日蓮宗の寺院はむしろ積極的に開帳を進めている。

②全体としては、居開帳がやや多い中で、日蓮宗は出開帳が居開帳の二倍弱の割合で実施されている。ということが指摘できる。

第二表は、出開帳のため江戸へ出府した寺社の国別分布をみたものである。江戸への出開帳を実施した国は、全体で三八ヶ国が記録されており、それぞれの国の開帳延回数から上位五ヶ国を挙げれば、武蔵・相模・下総・山城・甲斐ということになる。日蓮宗では、下総・相模・武蔵・甲斐・山城の順である。以下第二表によって次のようなことが知られる。

①江戸という地理的条件から出開帳寺院の国々は関東中心となり、その傾向は日蓮宗においても同様である。とくに、日蓮宗にあつては、下総・相模・武蔵の上位三ヶ国で日蓮宗の全出開帳延回数一八二回の半分以上を占めている。

②上位五ヶ国のうち全体と日蓮宗では、武蔵と下総、山城と甲斐の順が入れ替わっているように、日蓮宗にあつては聖人の由緒につながる国々の出開帳が多く、それらの国々の出開帳は順次増加している。

③相模については全体として中・後期あまり変化がない。しかし、日蓮宗にあつては後期急激な増加を示す。この増加が第一表で指摘した後期の日蓮宗の開帳の増加の一因であらう。

第三表は、出開帳場所すなわち宿寺の地域分布表であ

る。これによると、

①出開帳が最も盛んであつた中期においては、宿寺が江戸の各地に分布しており、深川・本所・浅草の三地域では全体の六一％が行なわれていた。

②後期にはこの三地域で全体の八一％の出開帳が実施されたが、日蓮宗の場合はそれ以上で、九一％もの多きを数える。これは、この三地域以外では行なわれないといつてもよい程の地域的特色であり、とくに浅草での出開帳が最も多い。

ということが出来る。

以上によつて日蓮宗の江戸出開帳は、浅草を中心とした深川・本所という江戸一番の繁華地において、下総・相模・武蔵等関東近辺の聖人の遺跡の分布する国々の寺院を中心に、中期以降次第に高まつていった祖師信仰にもなつて、順次その回数を増加させていき、その隆盛は後期に入つても一向に衰えることなく、むしろ一層盛んに展開されていった、ということができよう。

第1表 開帳一年平均回数

	全開帳	居開帳	出開帳
承応3~元文5 (1654) 前 (1740) 期	2.9	1.3	1.6
	0.16	0.06	0.10
寛保元~天明8 (1741) 中 (1788) 期	13.5	7.2	6.4
	2.04	0.67	1.37
寛政元~慶応3 (1789) 後 (1867) 期	8.3	4.6	3.7
	2.15	0.80	1.35
	7.3	1.32	3.4
		3.8	0.85

日蓮宗寺院開帳回数

全開帳	居開帳	出開帳
14	5	9
98	32	66
170	63	107
282	100	182

第2表 出開帳寺社国別分布表

	佐渡	越後	越中	常陸	甲斐	安房	上総	下総	武蔵	相模	伊豆	駿河	遠江	山城	近江	備前
前期	3	1		6	5	4	2	14	3	11	1	2	1	16	9	
中期	5	7	1	14	14	8	6	23	61	38	6	9	1	23	6	1
	5			1	8	5	1	14	8	7	2	5		6	1	1
後期	8	7	1	9	20	15	11	39	69	37	3	12	4	27	8	
	7				15	3	7	39	14	20	1	7	1	8	1	
計	13	17	2	29	39	17	23	76	154	86	10	23	6	66	16	1
	12		1	1	23	11	8	40	23	28	3	12	1	15	1	1
順位	⑩	⑥			⑤	③	⑭	⑦	③	①	①	③	②	⑧	④	⑤

第3表 出開帳場所（宿寺）地域分布表

計													
深川		本所		浅草		下駒谷・雑司が谷 （日築大塚・田白）		小石川 （湯島・本郷町）		芝・麻布 （赤坂・青山）			
前期	11	1	34	2	7	2	8	1	12	6	1	78	7
中期	26	6	81	1	62	34	42	7	37	10	28	6	276
		0.61			(0.64)								64
後期	48	16	72	2	100	78	17	3	17	4	18	2	272
		0.81			(0.91)								105
計	85	23	187	5	169	114	67	11	66	14	52	9	626
		0.70			(0.81)								176

（註）第1表～第3表において、同項目中先の数字は日蓮宗をも含めた全体のもの、後の数字は日蓮宗のみのもの。

大我の日蓮宗批判

宮 川 一 敬

華唱題思想と、浄土念仏思想との宿命の対決にも似た、浄土系との批判論争がその大半を示していた。即ち、法華教学と浄土教学の対決であった。しかしこの様な教学論争のなかにあって、大我の日蓮宗批判は特異な存在にあった。

大我の字は孤立、白蓮社天啓といい、一般的には孤立大江戸時代における日蓮宗に対する批判は、宗祖以来、法